

MACF礼拝説教要旨

2023年5月7日

「弟子の要件」

赦し、信仰、奉仕

ルカによる福音書17章

1 イエスは弟子たちに言われた。

「つまずきは避けられない。だが、それをもたらす者は不幸である。

2 そのような者は、これらの小さい者の一人をつまずかせるよりも、首にひき臼を懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がましである。

3 あなたがたも気をつけなさい。もし兄弟が罪を犯したら、戒めなさい。そして、悔い改めれば、赦してやりなさい。

4 一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」

5 使徒たちが、「わたしどもの信仰を増してください」と言ったとき、

6 主は言われた。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。

7 あなたがたのうちだれかに、畑を耕すか羊を飼うかする僕がいる場合、その僕が畑から帰って来たとき、『すぐ来て食事の席に着きなさい』と言う者がいるだろうか。

8 むしろ、『夕食の用意をしてくれ。腰に帯を締め、わたしが食事を済ますまで給仕してくれ。

お前はその後で食事をしなさい』と言うのではなかろうか。

9 命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろうか。

10 あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです』と言いなさい。」

これらのお話はイエス様が弟子たちに向けて伝えた話ですからイエス様に従っていかうとしている人たちにとってはとても大切な内容です。

そして、神様を信頼して歩もうとする時、どういう事柄に変化がもたらされるのか知るためにも有益な内容だと思います。

1) つまずかせないように：赦しを生きるように

人はどんなことでつまずくかわかりません。こちらは全く気にしていない

一言でも相手にとってはとんでもなくひどい言葉として伝わることがあります。ですから、やむを得ない面があるとは思いますが、イエス様はつまずかせないようにと語りました。つまずかせるといのは「あえて、わざと人が転んだり、困ったりするように何かを仕向ける」ことです。わざと困らせるように仕掛けを用意するわけです。

わざと挨拶をしない、とか、わざと情報を伝えないとか、その人が困っていることがわかっているのに、わざと無視するとか、私達の身の回りに案外起こっている出来事かもしれません。

イエス様は弟子たちに対して、そうであってはならないと語りました。

同時にイエス様は「赦すこと」を教えました。それが一日7度でも相手が「悔い改めます」と言ってきたら赦しなさいと。これは「言葉による赦し・和解の確認」を取りながら、前に進みなさいということでもあると思います。悪い感情や不安を抱えたままではなく、言葉のやり取りの中でしっかり互いに意思の疎通をもって明るい関係を構築しながら進みなさいということです。わだかまりを長く心にためておくと、つまずかせることしか考えられなくなってしまうことがあります。

2) 信仰の大きさではなく、誰を信頼し、何を信頼するか

弟子たちが「わたしどもの信仰を増してください」といった時、彼らはきっと謙遜な思いで、しかし、誰かに負けたくない思いでこれをイエス様に求めたと思います。

弟子たちは、とにかくなんでも一番になることが好きな人たちでした。

わたしたちはあの人達より信仰が深いとか大きいとか言うことに興味をもっていました。

イエス様は「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。」

と語りました。一体これはどういうことなのでしょう。

「からし種一粒ほどの信仰」というのは他人に見えるものではありません。また見せようと思っても無理です。つまり、競争の素材にはふさわしくないものなのです。

信仰が大きい、小さい、深い、浅いという評価は、自分たちでする必要はありません。

神様はそれをすでにご存知です。

問題は「だれを信頼しているのか」ということです。

たとえば、私が今まで行ったことのないところに旅行するとしましょう。

その際、その土地にひとりだけ知り合いがいるとして、その人の住所と電話番号があれば、他に何がなくても、私は安心してそこに行くことができます。

その際、私には大きな信仰も、小さな信仰も要りません。その連絡先さえ持っていてなくさなければ大丈夫です。

私が初めてオーストラリアに行った時、それが私の飛行機の旅の初体験でしたし、海外渡航の最初の経験でした。私はチケットとオーストラリアで待っててくれるヤングさんの連絡先だけ持っていました。それだけで大丈夫でした。あとは飛行機がそこに行くことを信じて乗り込んだだけでした。

アデレイドの空港にヤングさんが待っていてくれて、そこから自動車でするべきところまで連れて行ってくれました。

私が信じていたのは、飛行機がオーストラリアに行くということと、アデレイドにヤングさんが待っていてくれるということでした。万一の際のために住所を持っていました。

つまり、わたしたちの生活のなかで「神様との連絡」が取れさえすれば、神様が万全の備えをしてわたしたちのための最善を用意してくださるのです。

聖書の御言葉はその連絡の手がかりであり、神様がわたしたちを取り扱ってくださる内容の確認となるものです。それを手がかりに「祈ること」が出来たら、あとは、神様が動いてくださり神様が、わたしたちを動かしてくださるでしょう。

そのことを信じる必要があるのです。自分の信仰が大きくなって人より素晴らしいものになる必要はありません。連絡先がはっきりしていればよいのです。

3) しもべとしての意識、仕える生き方

そして、イエス様は、弟子たちに「しもべ」として生きるようにと励ましています。

しもべという存在は「人から感謝を求めることの出来ない存在」です。

しもべの本分は「仕えることにより相手が心地よさを味わう」「仕えることにより相手が安心し、祝福を受け取る」というところにあります。

感謝されようが、されまいが、なすべき「しもべとしてのわざ」を実行すればよいのです。

これは現代社会ではなかなか難しいですね。わたしたちはギブアンドテイクが普通になっているので、こちらの好意・行為に対して感謝を求めてしまうことがあります。それがないと不満を感じ、やってくれないと言い出すわけです。しもべが「それがあろうがなかろうが淡々と役割を果たす」ことで仕事をこなすわけです。

イエス様が教えた言葉

10 あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、
『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです』
と言いなさい。」

これを言葉にすると嫌味に聞こえることがありますね。心のなかでこれを
しっかり自分に言い聞かせながら、喜んで仕えることができるようになったら
関係は穏やかになっていきます。互いにそういう心でいられるなら。

わたしたちはどこかで「受ける喜び」と同時に「与える喜び」を
経験させて頂く必要があるのかもしれません。

日々の生活のなかで、心を磨こうとしたら
「赦し、信仰、奉仕」について考えて見ると良いかもしれません。

MACF礼拝映像はこちらです。
<https://youtu.be/D4AywW0aapY>